

I-2 「学びをつなぐ《探究するコミュニティ》としての実践」

経験的学びから自己の変容や活動の意義をつかむ

－主体的に世界にかかわり、世界の一員として行動していく(第3学年)－



平成24年度から英語科の核となる学びに「世界観を広げる」という文言を付け加えた。それは子どもたちに英語学習を通して、もっと世界を意識してほしいからである。子どもたちは2年時にアジア出身の留学生と英語で交流することで、アジアの一員としての自覚を高め、アジアの中での英語の使用価値について考えた。3年時ではアジアとアフリカに目を向けながら、世界の一員として何ができるかについて考え、実際に行動に移していこうとする自覚を高める。

1 学びの構想

世界観を広げる

子どもたちの世界観を広げていくことは英語科として課せられた使命の一つだと考える。日々の生活経験では気づかない世界の生活実情や貿易実情。アフリカのガーナが舞台となっている本単元での学習を通して、フェアトレードという支援の方法を紹介しながら、子どもたちは経済格差のある世界の実情とその世界とのつながりに気づくことができる。

アジアの一員として、世界の一員として

生活基準が高い日本に住む者として、世界の一員として何ができるかを考え行動していくことは大切であり、今後ますます重要になってくる。まずはアジアの一員として日本が担っている役割について理解し、次に世界の一員としての自覚を持ち、主体的に世界にかかわり行動していく。そんな生徒像を思い描いている。

支援について考える

単元のスタートで東日本大震災での支援について触れてから、世界の人々への支援を考えていく。これは先述の「アジアの一員から世界の一員」と同じように、「日本の支援からアジアの支援、そして世界の支援へ」と、身近なことから遠くのことを考えていくためである。このことにより具体的な支援の方法が思い浮かびやすくなることを期待している。

2 学びのストーリー

(1) 正しい支援とは？

(第1時)

甚大な損害をもたらした東日本大震災。教師は次の質問を子どもたちに投げかけた。

教師：What did you do for the people in Tohoku?

和毅：I gave money to them.

梨華：I sent money and messages with snacks with my English schoolmates.

教師：Fuzoku sent money and a square piece of thick paper to 9 fuzoku schools in the eastern part of Japan. Any other?

佑輔：I visited Tohoku and used money.

教師：Really? You went to Tohoku?

お金を寄付した子どもはたくさんいた。梨華は英会話学校の友達と一緒に、メッセージを添えてお金とお菓子を送った。学校としては9枚の色紙(各クラス1枚)を東日本の附属中学校に送ったことを教師が付け加えると、佑輔は実際に東北に行ってお金を使ってきたと答えた。教師も含め、その行動力にみんな驚いた。

次に教師が、東北の人のために今何をすべきか尋ねたところ、様々な意見が出てきた。

教師：What should we do for them now?

生徒：We should buy Tohoku's goods.

綾奈：We should build many houses in Tohoku.

幹太：We should give more money and save electricity.

生徒：We should make places to work(give jobs to them).

綾奈は、多くの人が家を失ったため、たくさんの家を建てるべきだとしており、仁恵は振り返りシートの中の感銘を受けた英文として綾奈の We should

build many houses(new towns). を挙げている。また、仕事を生み出すべきという意見も出てきた。この2つの意見は、一時的な支援ではなく、東北の人たちが自分たちの力で生活を営むために必要なことである。現地の人が自分たちの力で生活を営むための支援や、日本人としてどう行動すべきかは、昨年度 What can we do as a member of Asia? の中で学んだ考え方であり、子どもたちの意見内容の変容を感じた。

意見交換を終えた授業の最後に、同じ単元で書いた先輩の最終レポートと、昨年度中国出身の留学生と梨華が書いた意見を紹介した。

【平成23年度 2C授業 福井大学留学生】

Japan has advanced technology. It is in the frontiers of the world. Many Asian countries are still in the way of explore new technology in many fields. So it would be thankful if Japan can help these countries in these fields.

【平成23年度 2C授業 Final Report】

We can tell our education system to educate poor people in Asia who can't go to school. Now, we need a lot of money. And many countries in Asia are helping us. So I think we have to give our great technology and money in return. And also we can learn some problems in Asia and think what we can do for people who have difficulties.

この2つの意見を紹介したあと、教師は子どもたちに、Let's think about "right support." What is "right support"? と告げて、授業を終えた。

(2) フェアトレードって何? (第2時)

教科書に、リスニング活動を通してガーナを紹介したり、現在完了形(経験・完了)を用いながらフェアトレードマークやフェアトレード商品について話を進めたりしているページがある。それらのページの内容理解をしながら、簡単ではあるが、ガーナとフェアトレードについて学んだ。教師が子どもたちに、Have you ever heard of "fair trade"? と尋ねると、40人中5人だけがYes.と答えた。やはりフェアトレードは子どもたちにとって馴染みのないものであった。

授業の終わりに、子どもたちは教師が持っているジュート麻や羊毛フェルトでできたフェアトレードバッグを手で触れた。多くの子どもたちが自分の持っているかばんと比べてざらざらしていると感じた

ようで、「綱引きみたい」とつぶやいた子どももいた。そこで、教師は子どもたちに、Which is more expensive, normal bags or fair trade bags? と尋ねた。すると、多くの子どもが normal bags と答えた。そんな中、綾奈は次のように答えた。

綾奈: Fair trade bag is more expensive normal bags because fair trade bags isn't sold many stores.

フェアトレードのかばんの方が高いと思った子どもの多くが手作りだからという理由だったのに対し、綾奈は多くの店で売られていないからとしている。教師は、実際にどちらのかばんの方が高いか調べておくようにと伝えた。

(3) アジア・アフリカの子どもたち (第3時)

この時間の最初に、子どもたちは廊下に掲示してある写真パネルを改めて見た。3年生廊下には約1ヶ月の間、NPOシャプラニールさんから借りた写真パネルが掲示してあった。そこにはバングラディシュとネパールのストリートチルドレンの写真と最近うれしかったことが書かれている。また、教科書P.24には、ガーナのフェアトレードにおける様々な問題や、それに伴うガーナの子どもたちの厳しい生活実情が書かれている。そこで教師は、子どもたちに What are the problems on Page 24 and the pictures in the corridor? と尋ねた。子どもたちは廊下の写真パネルからわかる様々な問題を、教科書P.24の英文を使いながら表現していた。綾奈は下のようにまとめた。

- 自分・ They don't have their parents.
 ・ They don't have food every day.
 ・ They can't study.
 ・ They don't have money.
 ・ They can't go to school.
 ・ Some of the children can't have big dreams.
 ・ They don't have enough money, houses and food (to live).
 ・ Many children commit crimes.

綾奈の英文は、考えも英語自体もシンプルでわかりやすい。逆に友達の英文は、語彙が難しく複雑な文ではあるが、その考えには鋭いものがある。綾奈は、アフリカの子どもたちがとてもかわいそう、という感想を残している。

(4) これがフェアトレードか (第4時～第5時) フェアトレードの光と影

子どもたちは前時までに、アフリカやアジアの子どもたちの生活には様々な問題があるが、フェアトレードがその問題を解決してくれる一つの方法だと

たちにとって初めて会うアフリカの人と英語で交流するということは気を張ることのようであった。しかし、「ルーシーと英語でコミュニケーションがとれてよかった」という感想を残している子どもは多くいた。

(7) Take Action! (第8時～第9時) What do you want to do?

教科書 P.25には、フェアトレードのおかげで生活環境が良くなったというお礼の手紙が書かれている。そのページの内容理解をした後、子どもたちは個人で What do you want to do for the children in developing countries? に対する答えを考えた。綾奈と梨華はこの時間が終わる時に、下の意見を書き残した。

We should build schools for children in the future because they can't go to school now, and they want to learn anything.
(綾奈)

I want to learn about developing countries now, and in the future I want to visit there and teach language to the children because the children who can't go to school don't know their language. (梨華)

そんな発想もあるのか

次の時間に、前時で考えた意見について、まずペアで話し合った。その際、リピーティング、つまり、相手の意見を相手を主語にして言い直すことをするように伝えた。リポートすることによって、聴き手は話し手の意見をより注意深く聞く必要がある上に、話し手は聴き手が理解してくれているとわかり安心するからである。



グループの話し合いを教師がサポートする

次にグループメンバーとも話し合った。教師は話し合いがうまく進んでいないグループに入り、話し合いをコーディネートする。また、その時教師が使った What do you think, ○○さん? や How about

you? などの「つなぐ英語」を次から使ってみるようにも伝えた。

この後、個人の意見をクラス全体で共有した。

教師: What do you want to do, Kanta?

幹太: I want to go to developing countries and help the children.

教師: Why?

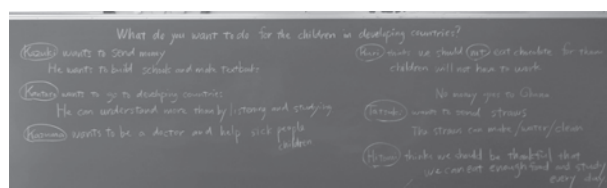
幹太: Because if I go there and see the children, I can understand more than by listening and studying.

教師: Do you understand? Do you want to visit developing countries?

Yuma, why do you want to visit developing countries?

悠馬: In the future, I want to go to Africa as a doctor, and help sick people, sick children.

教師: Oh, you want to be a doctor? If you can do this, I'll respect you.



名前と正しい英文を板書していく

Next, I want to ask a girl. Mm... Riri.

莉璃: We should not eat chocolate for children.

教師: Why?

莉璃: Because children will not have to work.

教師: Do you understand this idea? What do you think about this idea? Do you think it's a good idea?

生徒: I like chocolate, so I want to eat chocolate!

A L T: If we stop eating chocolate, no money goes to Africa. It won't help the children and Africa.

教師: I see, but my idea is like this. It's very difficult to stop eating chocolate, but Riri thinks about the children in Ghana. She worries about other people. So it's a great thing.

教師は予めおもしろいと思った意見を持っている子どもをチェックしておいた。また、教師が子どもたちと子どもたちをつなぐコーディネーターの役を務める。上記のように板書したのは、発表した子どもも周りで聞いている子どもも、意見内容と正しい英文を振り返ることができるからである。

みんなで世界を良くしていこう!

この後、教師から Message from Mr. Endo というワークシートを渡し、教師が音読した。そこには様々な支援の方法が種類毎に英語でまとめられていた。また、「一人で世界を変えることはできないから、まず自分の意見や考えを他の人に伝えよう」や「今できることと将来できることを分けて考えよう」といったメッセージも添えられていた。

ここで、A L Tにも子どもたちに何かメッセージ

がないか尋ねたところ、次のようなメッセージを伝えてくれた。

A L T : In Japan, we must learn about the rest of the world.
We are very very lucky in Japan.

教師 : You are very lucky children. Actually, Hitoe's idea is like this.

We should be thankful that we can eat enough food and study every day. (仁恵)

仁恵の意見を聞いた後、子どもたちは What do you want to do for the children in developing countries? に対する自分の意見を now と in the future に分けて改めて書き直した。次は綾奈と梨華の意見と授業後の感想である。

I want to send a lot of food to developing countries now because they can't eat food every day.

We should build new schools near the children's houses in the future because I think they have to learn many things.

「一人の力では世界を変えることはできない」

この言葉を私はよく聞きます。もし、変えたいならば人とながかり協力するという、今の学校生活でふつうに行われていることが世界を変えるために大切なことなんだと改めてわかりました。(綾奈)

I want to study English hard now, and in the future I want to make good use of my English to help people in need. If I can speak and understand English well, I can communicate with many people in the world and take action to solve problems in other countries.

発展途上国の人たちに何ができるか、何をすべきか、考え直すことができた。(梨華)

綾奈は学校を建てるのを「子どもたちの家の近くに」と付け加え、また、多くのことを「学びたい」が「学ばなければいけない」に変わっている。以前「レヌカの学び」という教材を使った時の授業の終わりに、What kind of technique do they(people in Nepal) need? と尋ねたことがあった。その答えの一つが、They need techniques to make roads. であった。綾奈は現地の子どもの気持ちになって、学校へ通うことが難しかったら意味がないと考えたから、上記のように意見が変わったのではないだろうか。また、綾奈は教師からの You must work with many other people as a team. というメッセージを、自分たちの学校生活に照らし合わせて考えている。

一方、梨華は「現地に行って言語を教えたい」という意見から一変して、「英語を一生懸命勉強して、他の国々の諸問題を解決するために行動を起こしたい」という内容に変えてきた。これは、人に何かすることよりも、まずは自分が変わらないといけない

と思ったからではないだろうか。

次の時間の始めに、全員分の意見が載っているワークシートを配布し、話をしたい人の所へ行って話すように伝えた。綾奈は次のように考えた。

全員の考えを見ると同じ人や全くちがう考えを持っている人などさまざまで、もし実現したら発展途上国という国がなくなり、どの国も幸せな国になれるのではないかと思いました。(綾奈)

(8) 「We Are The World」への思い (第10時)

この時間は誰もが知っている有名な歌「We Are The World」を聞くことにした。子どもたちはこの歌を知ってはいるが、詳しい制作過程までは知らない。そこで、ハリー・ベラフォンテ氏の思いや制作過程、収録現場等について書かれたものを各自が黙読し、その後、「We Are The World」のDVDを見た。

これまでの一通りの授業で世界について考えてきたが、僕が思ったことは一つ。世界に足をふみ入れて、世界をよりよくするようなことをしたい。今までの授業で一番感動したのが「We Are The World」のPVだ。この人たちのように困っている人々には喜んで手を差し出すような人間になりたい。(悠馬)

「We Are The World」はすてきな歌にするためではなく、世界の人々に発展途上国の人々が今困っていると伝えるための意味の深い歌なんだとわかりました。この歌には、アフリカの人々に対する思いがたくさんつまっています。(綾奈)

(9) 意識の変容や活動の意義をつかむ (第11時)

以前授業に参加してくれた福井大学のアフリカ出身の留学生ルーシーは、母国ウガンダで先生をしている。そこで、この時間にルーシーが働いているウガンダの学校の生徒に向けて手紙を英語で書いて、本単元を終えることになった。次は綾奈の手紙本文と単元終了時に書いた振り返りである。

My name is Ayana. I am a junior high school student in Japan. When I learned about developing countries in English class, I thought developing countries together. "What do you want to do for the children in developing countries?" our English teacher asked us in the class. We thought for the children. I want to learn about developing countries now because I do not know you. We should build new schools for the children in the future because I think you have to learn many things. I want to do many things for you. In your opinion, what should we Japanese do? I hope you are happy.

世界には困っている、幸せではない子どもたちがいると知っていました。しかし、その子どもたちは毎日が幸せではないとは思っていないとわかり、勝手に決めつけてしまうのはよくないと思いました。

「What do you want to do for the children in developing

countries?」この質問に対しての答えが私にははじめ全く思いつきませんでした。本当に自分は助けたいと思っているのかと不安になることもありましたが、でも、思いついてからは実現しなくてはならなかった意味がないと思いました。

また、手紙により自分たちの考えたものを伝えることによって、より意識を高めることができたのではないかと思います。本当にためになる単元であったと改めて思いました。

(綾奈)

綾奈は英語は決して得意ではないが、自分の考えの妥当性や自分の意識の変容、手紙を書く意義などを、自分なりにつかんでいる。また、その真面目な性格からか、ウガンダの生徒に英語で手紙を書くときに、単元スタート時に紹介した先輩のレポートや自分が今までに取り組んできたワークシートなどを参考書いているようである。

(10) ウガンダから手紙が返ってきた！ (第12時)

6月に手紙を出し、5ヶ月後の11月のことである。ついにウガンダから手紙が返ってきた。



アフリカの同年代の子どもたちと英語で交流する。不可能のようなことが現実となり、子どもたちは自分宛に返ってきた手紙を、班員の協力のもと、身を乗り出して読み解いていた。難しい表現もあったが、子どもたちの何とか読み解こうとする眼差しは真剣そのものであった。子どもたちの中には「手紙もう一回書いてもいいですか」と聞きに来る者もあり、世界とつながり出している子どもたちの今後の活躍に期待が膨らんだ。

3 省察

(1) 日常生活の中に英語を組み込む

本単元の中で子どもたちは、英語を使いながら東日本大震災での支援について話し合ったり、自分のかばんとフェアトレードバッグを比較したり、「レヌカの学び」を通して生き方の裏にある価値観を探ったりしてきた。日常生活について英語で話し合うことで、子どもたちは英語に対して構えることなく、自然な形で自分の意見や考えを英語で表現することができた。

(2) 「国際共通語としての英語」が英語学習のモチベーションを高める

第9時で紹介したように、梨華は What do you want to do for the children in developing countries? という質問に対して、最終的に I want to study English hard. と答えた。また、アフリカからの英語の手紙を真剣に読み解いたり、再度手紙を出したいと思ったりする子どもがいた。これは、国際協調の精神を高めることが、英語学習のモチベーションを高めることにつながったことを意味する。一見文法指導から離れているように見える活動が「国際共通語としての英語」を子どもたちに意識させ、真の意味での英語学習へのモチベーションを高めたのである。

「〇〇が英語で言えた！」という喜びもあるが、「英語で〇〇とつながった！」という喜びもある。英語学習の初期では前者の喜びが大切である。しかし、ある程度自分の意見・考えを英語で表現できるようになった子どもであれば、後者のような英語学習の真の目的に結びつけることが大切になってくる。子どもたちの発達段階に応じたねらいや学習展開を今後も考えていきたい。

(遠藤 光彦)

参 考 文 献

- 大下邦幸 『コミュニケーション・クラスのすすめ』 東京書籍 2009.
 外国語能力の向上に関する検討会 「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策 ～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～」 2011.
 福井大学教育地域科学部附属中学校 『研究紀要』 第40号 2012.
 福井大学教育地域科学部附属中学校 『研究紀要』 第40号 別冊(英語科編) 2012.

参 考 資 料

- NPOシャブラニール市民による海外協力の会 『ダッカのストリートチルドレン』『家事使用人として働く少女』
 土橋泰子 『レヌカの学び～自分の中の異文化に出会う～』 あおもり開発教育研究会／開発教育を考える会 2004.